

## 各区についての50年(40年)

川崎市は昭和47(1972)年の政令指定都市移行に合わせ区制を開始。本市の指定都市としての歴史は、各区についての歴史でもある。ここでは、本市を構成する7区それぞれの50年(宮前区、麻生区は40年)の歴史を振り返るとともに今後を展望する。また、各区が50周年(40周年)を機に実施した主な行事をまとめた。



# 川崎区

## 川崎区の50年と、その先

川崎区役所企画課 担当係長 上原 彩

### 1 はじめに、川崎区の50年とは

#### (1) 工業+商業のまちとして賑わう

川崎区は、大きく分けると、区北部の川崎駅東口地区が商業エリア、中部が住宅地エリア、南部の臨海部地区が工業エリアとなっている。50年前の昭和47(1972)年は、川崎駅前の京急線高架化から6年、産業文化会館(現在の教育文化会館)開館から5年、市電廃止から3年経った時期である。現在のまちのかたちは、ほぼ出来上がっていた。南部エリアには石油や鉄鋼のコンビナートが形成され、川崎駅東口周辺地区は、銀柳街や銀座街などの大型商店街が賑わい、小美屋やさいか屋などの百貨店が軒を連ねる賑やかなまちとなっていた。

今では、それらの百貨店は惜しまれつつも閉店し、大企業の高炉の休止が決定するなど、一時代の区切りがついている感もあるが、昔と変わらず賑わう川崎大師平間寺があり、川崎駅周辺には大型商業施設やシネコンが複数ある便利なまちであり、昨年度は多摩川スカイブリッジも開通して羽田エリアとのアクセスがよくなるなど、歴史と変化が共存するまちであるといえると思う。

#### (2) 人口は「構成」が大きく変化

50年前の川崎区は、人口239,384人(昭和47(1972)年4月)のまちだった。今は232,332人(令和4(2022)年9月末)で、市総人口が約50万人増えている中、なんと僅かながら減っているのである。その間、14歳以下の子どもは約0.4倍に減り、65歳以上の高齢者は約5.2倍に増えるなど、高齢化

率は高くなった。また、外国人登録者数は約2.5倍に増えた。50年前には登録者の国籍はほぼ朝鮮・韓国だったが、今は中国国籍の方が一番多く、次いで朝鮮・韓国、ベトナム、フィリピンと続き、多文化共生のまちという現在の川崎区の特徴が現れてきた。

年齢別人口構成については、50年前からそのまま年齢が上がったような構成であり、長く住んでいる人が多いということがうかがえる。

### 2 50周年、400年、そして100周年

今年度は、区制開始から50年目の節目の年である。川崎区では、記念事業として、昭和30~40年代と現在の区内各所の新旧写真を並べたパネルと、川崎市市民ミュージアムからお借りした昭和38(1963)年頃の川崎駅東口周辺のジオラマの展示を行った。これらを多くの方に見てもらうために、区内各所を巡回した。展示を見ていただいた方からは、「懐かしい!」「今と全く違う」という言葉を多くいただき、長くお住まいの方にはまちの魅力を再確認していただき、子育て世代や子どもたちなど当時を知らない年代の方にはまちの歴史を知ってもらうことで、まちへの愛着を深めてもらうことができたのではないかと感じている。

また、令和5(2023)年は東海道川崎宿起立400年である。この節目の年を盛り上げ、川崎宿という地域資源が持つ魅力を最大限に引き出していきたい、その後に続く市制100周年に向けて、アニバーサリームードを継続させていきたいと思う。

### 3 さいごに

地域の方と話をしていると、川崎区というエリアを（少しダークな部分も含めて）愛していて、新しい物事に対しても飄々<sup>ひょうひょう</sup>と構えて受け入れていく方が多いなあ、と思う。机の前であれこれ悩むよりも、地域の方と一緒に考える方が早く解決するのではないかと感じる今日この頃、この先も、まちの変化を、地域の方と一緒に感じていきたい。



宮前歩道橋(現ハローブリッジ)から旧本庁舎  
(当時川崎区役所を含む)を望む  
(昭和49(1974)年/写真提供: 所美美子氏)



## 幸 区

# 時代に合わせて変化し、 多様なポテンシャルを秘めるまち幸区

幸区役所企画課 岩田 貴裕

### 1 「工業のまち」から「住みやすいまち」へ

幸区は明治後期頃から工業都市として栄え、産業構造の変化に伴う工場の廃止や移転が進む中、川崎市が指定都市に移行した昭和47(1972)年に誕生した。工場労働者が多く居住していた当時、近隣住民の付き合いが盛んに行われており、その精神が今日までの町内会・自治会の連携や地域のお祭り、見守り活動等として継承されている。一方、街並みは工場の跡地にマンション群や商業施設等が建設されるなど、この50年間で「工業のまち」から「住みやすいまち」へ様相を変えた。その中でも特に変貌を遂げた2地区を紹介したい。

#### (1) 日吉地区(鹿島田・新川崎駅周辺エリア)

幸区が誕生した年に動物展示が始まった夢見ヶ崎動物園は市内唯一の動物園であり、自然も豊かなことから、地域の憩いの場として長く親しまれている。その東側に位置する新川崎駅に隣接する土地は、かつて新鶴見操車場として、東洋一の規模を誇り日本の物流を支えていた。昭和59(1984)年に一部機能を残して廃止となり、跡地の一部に「新川崎・創造のもり」が開設した。慶應義塾大学のキャンパスとかわさき新産業創造センターを中心に構成

され、産学官の連携による先端技術の集積拠点である。令和3(2021)年には量子コンピューター「Kawasaki」が設置・稼働され、この場所で行われている研究が未来を変える可能性を秘めている。



昭和63(1988)年の鹿島田駅方面(写真提供: 所美美子氏)

#### (2) 南河原地区(川崎駅西口周辺エリア)

川崎駅北西に位置する明治製糖や明治製菓の工場跡地がオフィスや研究開発施設へ利用転換されて以降、川崎駅西口周辺は大きな変化を遂げた。平成16(2004)年には旧国鉄変電所跡地に「ミュージアム川崎シンフォニーホール」が開館し、音楽のまち・かわさきを象徴する施設となっている。平成18(2006)年には東芝の堀川町工場跡地にラゾーナ川崎プラザがオープンするなど、川崎駅西口は数十年間で、大型商業施設や高層集合住宅、オフィス

ビル、文化芸術施設が集まる利便性が高いエリアへと変化した。一方、同地区は多くの商店街が残っており、日常生活に密接した地域商業の場としての側面を現在も見る事ができる。

近年はビジネス・宿泊・商業機能の大規模複合型街区の「KAWASAKI DELTA」がグランドオープンし、さらなる賑わいを見せている。また、令和5(2023)年秋頃には大宮町にエンターテインメントホール(ライブハウス)が誕生予定であり、市制100周年に向けて、さらなる盛り上がり期待されるエリアとなっている。



令和3(2021)年の川崎駅西口周辺

## 2 市制100周年・区制60周年に向けて

50年間で様々な変化を遂げてきた幸区には現在、自然や産業、文化・芸術などの多様な地域資源がある。今後も幸区が持続的に発展するためには、住民や民間企業、団体、教育機関など様々な地域人材と協働で地域資源を活かしたまちづくりを進めていくことが重要である。

特に幸区は、市全体の年少人口が減少過程に移行したと想定される中、令和17(2035)年まで人口が増加すると予想されており、若い世代の活躍が今後も見込まれる。また、川崎駅西口周辺の事業者や新川崎地区の研究開発機関をはじめとする多様な企業・施設との連携により、特色のあるまちづくりも期待できる。

子ども・若者や企業など多様なポテンシャルを秘めた様々な主体をつなげ、それぞれの強みを生かし活躍できる場を設けることで、さらに魅力あるまちに変化することを切願する。



# 中原区

## 中原区制50周年 ～さらにその先へ～

中原区役所まちづくり推進部企画課 担当係長 深谷 英司

### 1 中原区の歴史

中原区は、昭和47(1972)年の政令指定都市への移行に伴い、当時の中原支所の管内(丸子、小杉、大戸、住吉、玉川地区)を区域として誕生した。中原の地名の由来は、現在の平塚市に建てられた中原御殿から江戸を結ぶ中原街道がこの地を横断し、その中継地として小杉に仮御殿が建てられたことに因むと言われている。

戦後の高度経済成長期には都市化が急速に進行し、歴史的な中原街道を中心に府中街道、綱島街道や、新たな道路整備、鉄道敷設によって、活気ある商店街や住宅地が造成された。

近年では企業の研究・開発部門などの都市型産業が立地し、また、武蔵小杉駅周辺での大規模再開発などにより人口が増加しており、平成31年(2019)4月には7区で初めて人口が26万人を超え、さら

なる人口増が見込まれている。

### 2 中原区が誕生してから

#### (1) 指定都市移行～2000年まで

指定都市移行後は武蔵小杉駅周辺が中原区の行政の中心地となり、昭和49(1974)年に旧中原市民館、旧中原図書館が、昭和58(1983)年には旧総合自治会館が開館するなど公共施設の整備が進んだ。

#### (2) 2000年以降

平成12(2000)年のNEC玉川ルネッサンスシティサウスタワー竣工を皮切りに、武蔵小杉駅周辺での再開発が進み、公共施設、商業施設、タワーマンションなどが次々と建設・整備された。平成12(2000)年に東急東横線に目黒線が乗り入れ開通、平成22(2010)年にはJR横須賀線武蔵小杉駅が開業した。

それらの再開発の進捗に合わせ、都心へのアクセスの良さや住宅、買物、病院など生活の利便性が注目され、不動産業者の「住みたい街ランキング」でも上位になるなど、多くの転入者が訪れる人気のまちになった。まちの活性化の反面、人口増に伴う地域コミュニティ形成や、東日本大震災、令和元年東日本台風などの経験から防災などの課題にも直面した。現在もそれら諸課題に対応するため、区民との協働により取り組みが進められている。



中原区制50周年記念イベント

### 3 さらにその先へ

#### (1) 現在の課題

中原区は現在も人口が増加しており、令和3(2021)年度も10%を越える増加率となっているが、リモートワークなど場所を選ばない働き方も一般化し、都心への通勤が前提ではなくなりつつある現在、中原区が成長を続けるためには、利便性だけではない、これからの時代においても選ばれ続けるまちになる必要がある。そのためにはさらに区の魅力をアップし、行政、区民が一丸となって課題に取り組むことが重要で、それには何より、区民ひとりひとりの地元への愛着意識が欠かせない。

令和4(2022)年度は、7月1日に区制50周年を迎えたことを契機に区の歴史を振り返り交流していただくことを目的とし、中原区をもっと好きになってもらうよう、9月に開催した記念イベントをはじめさまざまな記念事業に取り組んだ。

#### (2) 今後の展望

中原区は自然、スポーツ、商業施設、商店街など魅力が多いまちである。今後も、等々力緑地も再編整備が進められるなど、さらに魅力的なまちに発展していく。住民のライフスタイルも多様化しているなか、さまざまなまちの魅力の中から自分に合うものを選び、区民それぞれがお気に入りの中原区を形づくってもらえるようになることこそ、これからは重要ではないだろうか。

武蔵小杉駅周辺で最初のタワーマンションが竣工してから17年が経過し、この街で生まれた子どもたちも大きく成長している。その子どもたちにとって、このまちが魅力的なふるさとになることを願っている。

令和6(2024)年には川崎市制100周年を迎える。これからも区民の皆さまと力を合わせて、区制60、70周年、さらにその先へと続く、中原区の魅力づくり、魅力発信に取り組んでいきたい。



## 高津区

## これからの高津区を、区民の皆様とともに

高津区役所まちづくり推進部企画課 担当係長 **今井 映子**

### 1 はじめに ～50年の変貌～

昭和40年代初頭。高津地区・橘地区では第三京浜道路の全面開通、田園都市線溝の口駅から長津田駅間の開通、尻手黒川道路の一部完成など、交通基盤が整った。高津区の誕生前夜のことである。

昭和47(1972)年の区制定以後は、これらの交通インフラを線とし、ベッドタウンとしての住宅需要に対応して面的な開発が進んだ。人口流入と経済

発展に伴い、KSPの開業、溝口駅前の再開発、区内各所での大型マンション建設など、まちの景色は大きく変貌を遂げる。一方で、失われゆく緑や景観への危機感から、二ヶ領用水久地円筒分水の維持管理活動、大山街道における都市景観形成地区指定など、住民発意の活動も区内各所で立ち上がった。また、東日本大震災、令和元年東日本台風等の経験から、住民間のつながりづくりが見直されてもいる。

今日の高津区は、都市の便利さを享受しつつも歴

史文化の残り香、農地や多摩川の自然を身近に感じられるまちとなっている。

## 2 「脱炭素アクションみぞのくち」の取り組み

高津区溝口は、本市の脱炭素戦略「かわさきカーボンゼロチャレンジ2050」において、脱炭素化都市の身近な取組の具体像を示すモデル地区となっている。

振り返れば、区では平成21(2009)年に「エコシティたかつ」推進方針を策定し、生物多様性や気候変動適応策などいち早く環境問題に取り組んできた。また、区の特徴として、地域活動に熱心な事業者や団体が多い。このような土壌から、事業者の強みを活かしたパートナーシップを推進することにより区民の行動変容を促す取組を推進しているところである。

区民ひとりひとりの行動がまち全体の環境意識向上につながり、脱炭素をリードするまちになることが新たな区の魅力になると期待し、日々取り組んでいる。

多く、そこからまちへの関心を深め、ともにまちづくりを。そんな思いで事業を実施してきた。

区制50周年は、節目ではあれど、ゴールではない。間近に市制100周年というもう一つの節目があり、その先に綿々と続く未来がある。未来に向けて、ロゴマークに描かれた地域資源を保全すれば区の魅力を維持できるのかといえ、必ずしもそうではないと私は思う。時世の流れに従って、求められるものや区民の意識も変わる。区内には、古い建物の良さを活かしつつ現代に合った業容にリノベーションすることで、まちの新たな魅力となった事例も複数ある。守ることでますます輝くのか、生まれ変わることで輝きを取り戻すのか、地域資源を活かすのは、区民の感性やまちに対する思いである。



区の魅力をデザインした区制50周年記念ロゴマーク

## 3 区制50周年、その先へ

区制50周年記念事業にあたっては、区の歴史や地域の魅力を皆様にご存知いただくことを大切にしてきました。地域に関心を持ち、まちを好きになり、まちづくりに参加する。そのきっかけは「知る」ことから始まるからである。

記念ロゴマークは、区民によるワークショップで挙げた区の魅力、地域資源からデザインしている。区に転入して日の浅い方に魅力を知っていただき、長くお住まいの方にも改めて魅力を再認識していた

## 4 結びに

各段で述べてきたように、区の魅力を育み、守ってきたのは、他ならぬ区民の皆様である。行政はそれを支援しているに過ぎない。

区制50周年記念事業で、ロゴマークに顔をはめて写真を撮れるパネルを作成した。区民の皆様こそが、高津区の魅力であるという思いを込めている。笑顔で写真を撮る子どもたちと手を携えて、これからの高津区の魅力を高めてゆけることを願う。



# 地域の資源を活かし、 地域の人とともに進めるまちづくり

宮前区役所企画課 担当係長 **山田 将史**

## 1 はじめに

宮前区は、地域に根付いた文化・歴史、農ある風景や平瀬川の水辺、菅生緑地や身近な公園の豊かな緑

などの多彩で美しい地域資源に恵まれたまちである。

昭和41(1966)年の溝の口から長津田間の田園都市線の開通、昭和43(1968)年の東名高速道路・東名川崎インターチェンジの開通・開設などにより

交通基盤が整備され、郊外住宅地としての開発が進んだ。

区が誕生した昭和57(1982)年と令和4(2022)年の人口を比較すると、148,266人から234,964人に増加(約1.6倍)、世帯数については、48,551世帯から105,039世帯に増加(約2.2倍)している。

区外へ通勤・通学する方が多く、昼夜間人口比率が市内で最も低い。また、区内の0~14歳の人口の割合、「夫婦と子」のみからなる世帯の比率が7区の中で最も高く、区内には多くの核家族が暮らしている。

市内7区の中では、農地の面積、販売農家数が最も多く、公園緑地数は2番目に多いなど、身近に農や緑を感じることができることも一つの特徴である。

## 2 宮前区の強みとは

郊外住宅地として新たな住民を招き入れながら発展してきた宮前区にとって、一番の強みはなんといってもそこに住む「人」であると感じる。宮前区には、川崎や武蔵小杉、溝の口、登戸、新百合ヶ丘のように交通が結節し、多くの人が集まる拠点は無いが、それぞれの地域に根付き、地道に活動をされている方が数多くいる。こうした方々に最大限力を発揮してもらうこと、また、まだ地域にあまり関わりのない方の力を引き出していくことが、宮前区のまちづくりを進めていく上で非常に重要である。

## 3 地域の人とともに進めるまちづくり

宮前区には緑が多く、緑の保全活動や緑を使った体験学習を行っている団体がいくつもある。また、子どもの割合が高く、核家族が多いという特徴もあり、地域での子育てを支えるために自主的に活動しているグループが数多くある。

令和4(2022)年11月に菅生緑地西地区(水沢の森)で、小学生とその親を対象とした自然体験学習イベント「水沢の森でわんぱくしよ」という取組が行われた。身の丈を超えるススキの原っぱで宝探しをする「ススキっ原迷路」、ビオトープ池近くに泥遊び場を作り、自由に泥に触れる「泥遊び」などを行い、当日はたくさんの親子の笑顔が見られた。

この取組は、水沢の森の保全活動を20年以上続けてきた「水沢森人の会」と、宮前区内の公園でつながりのある子育てしやすい環境を生み出すために活動してきた「宮前区冒険遊び場ネットワーク」が協力し、建設緑政局が中心となって実現したもので、区役所各課は局と地域をつなぐ役割を果たした。2団体にとっては、お互いを知り、関わるきっかけになり、イベント参加者にとっては、宮前区の魅力を発見し、地域で活動されている方を知る貴重な機会になったと考えている。



「水沢の森でわんぱくしよ」の様子

## 4 市制100周年を契機として

地域の課題解決・魅力づくりは、地域の「人」の力なしでは進まない。それぞれの人の日々の活動が宮前区の暮らしを支え、魅力を形作っている。地域の人の力を活かしていくために、市役所と区役所が地域とどう関わるべきなのかをしっかりと考える必要がある。

市制100周年は多くの人々が地域に関心を寄せる貴重な機会である。この機会を活かして、区役所職員も地域の一員として役割を果たし、宮前区の皆様と共に、宮前区のまちづくりを前に進めていきたい。

# 多摩区 多摩区における50年のあゆみ

多摩区役所企画課 担当係長 星野 弘明

## 1 区制施行後のあゆみを振り返って

多摩区は、昭和47（1972）年に本市が指定都市に移行した際に誕生し、昭和57（1982）年の「麻生区」の分区を経て、現在の区域に至っている。

市内を縦断するJR南武線が区内で小田急小田原線、京王相模原線と交差し、都心への交通の便が良いこともあり、高度経済成長期の昭和40年～50年代には、南生田地区や西菅地区など丘陵地を中心に土地区画整理事業が行われ、周辺にも民間開発の住宅地が広がった。しかしながら、宅地化が進む中で多摩川沿いの平坦地においては、道路等の都市基盤が整備されないまま、農地の宅地化が進んだことから、登戸・向ヶ丘遊園駅周辺地区では、住宅の密集や細い道路等、防災や生活環境の課題が生じた。そのため、昭和63（1988）年の登戸土地区画整理事業の計画決定以降、川崎市の地域生活拠点に相応しい市街地の形成が進められ、平成18（2006）年には登戸駅のペDESTリアンデッキが完成するなど都市基盤が整備されてきた。こうした市街地の発展に伴い、分区当時、約14万6千人であった人口は増加を続け、令和4（2022）年12月には、約22万4千人に達している。

一方で、区の北部を流れる多摩川によってできた沖積平野と南部の多摩丘陵で形成される多摩区は、「水」と「緑」によってまちとしての魅力を高めてきた。

多くの用水や多摩川の支川が街なかを流れ、中でも二ヶ領用水の宿河原線沿いは、親水性や生態系に配慮した整備が行われ、桜の名所としても親しまれている。

また、丘陵地の斜面緑地やまとまりのある緑地を有するとともに、「多摩川梨」の栽培が盛んだった、かつ



まとまりのある緑地を有する  
自然豊かな多摩区

ての農村らしい景観も随所に残っている。中でも首都圏を代表する緑の宝庫である生田緑地では、個性豊かな文化・教育施設の整備等が進められ（表1）、市内有数の観光名所となっている。

また、3つの大学（専修大学、明治大学、日本女子大学）とゆかりがあることも区の大きな特徴であり、これらの大学と区役所では、平成17（2005）年に協定を締結し、大学の専門性や知的資源を活かした地域課題解決のための取り組みも推進しており、「学び」のまちとしても発展を続けてきた。

年	施設の開設等
平成11(1999)年	「岡本太郎美術館」開館
平成14(2002)年	向ヶ丘遊園閉園、生田緑地ばら苑一般開放
平成23(2011)年	「藤子・F・不二雄ミュージアム」開館
平成24(2012)年	かわさき宙と緑の科学館リニューアルオープン
平成29(2017)年	日本民家園開園50周年
令和3(2021)年	かわさき宙と緑の科学館開館50周年

表1 生田緑地における文化・教育施設の整備等

## 2 今後のさらなる発展に向けて

多摩区では、まちの賑わいを創出し、将来にわたって地域全体の活性化につなげていく取り組みが現在も進められている。令和5（2023）年3月には、生田浄水場用地の有効利用の取り組みとして、市民へスポーツや交流の機会を提供する施設「Ankerフロンタウン生田」等の供用開始が予定されるとともに、令和6年度には、川崎市制100周年を迎え、その象徴的事業として開催される「全国都市緑化かわさきフェア」のコア会場の一つに生田緑地が選定されている。

また、30年以上続く登戸土地区画整理事業も、令和7年度



登戸土地区画整理事業の状況

末の事業完了に向けて大詰めを迎えている。

区役所は、こうした動向をまちづくりの好機と捉え、様々な立場で活動する人と人、人と資源のつながりを広げて、多様な主体と連携・協働しながら、魅力ある地域資源の価値を一層高めていくことが求

められている。こうした取り組みを通じて区民一人ひとりがまちへの愛着を持ち、住み続けたいと感じることができる「まち」をみんなで作り上げていきたいと考えている。

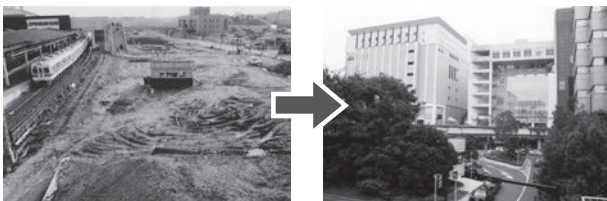
# 麻生区 麻生区の40年とこれから

麻生区役所企画課 森田 香織

## 1 麻生区の誕生

指定都市移行からちょうど10年後の昭和57(1982)年、多摩区から分区してオープンした麻生区役所の庁舎は、広大な土地の中にポツンと佇んでいた。

多摩丘陵の一角に位置する麻生区は、当時、農地と集落が散在しており、新百合ヶ丘駅周辺もまだ何もない開発途上の状態であった。



麻生区役所建設当時の風景

現在の新百合ヶ丘駅周辺地区

は、市全体の満足度を10ポイント以上も上回っている。また、公園緑地における活動団体数も市内で最も多い。

これらのことから、麻生区民は自然豊かな住環境への満足度が高く、またその環境を守り次世代へつなごうとする意識が強いことが窺える。

区としても、恵まれた環境を活かしたまちづくりを行うため、地元住民や農家、関係団体等と連携した取り組みにより地域活性化を図っている。

## (3) 芸術・文化のまち麻生

新百合ヶ丘駅周辺には、恵まれた住環境を求めて多くの芸術家や文化関係者が移り住み、また芸術・文化関係施設も集積している。こうした地域資源を活かしながら、年間を通じて市民の手によるさまざまな催しが開催されるなど、芸術・文化を身近に楽しめるまちになった。平成22(2010)年にはしんゆり・芸術のまちづくりが発足し、芸術・文化のまち麻生の確立を目指している。

## (4) 市民活動の発展

市街地の発展により、分区当時約9万6千人だった人口は現在約18万人と約2倍に増えた。新たに開発された地域から、また持ち家率が高いことなどの背景から、自分たちの手でまちづくりをしようという機運が高まっていたものと推測されるが、市内でも特に市民活動が活発なまちであると言われていた。平成19(2007)年には、市民活動の拠点として「麻生市民交流館やまゆり」がオープンし、ボランティアによる運営がなされていることは麻生区の大きな特徴の一つだろう。

## 2 発展

### (1) 進む市街化で移り行くまちなみ

高度経済成長期以降、都市部近郊の都市化の波を受けて、麻生区エリアも開発需要が高まり市街化されていく。昭和43(1968)年には、「計画的に市街地を整備し緑地を保全する地域」に位置付けられたことにより、里地里山の原風景を残した自然豊かな市街地が形成されていった。

誕生から約30年でほぼ現在の姿となり、平成10(1998)年には新百合ヶ丘駅周辺地区が当時建設省の「都市景観100選」に選出されるまでに至った。

### (2) 農と環境を活かしたまちづくり

麻生区は、区面積に占める緑地・農地の割合が26.3%と市内で最も高い。令和3年度のかわさき市民アンケートにおける生活環境の満足度の項目で



### (5) 企業によるまちづくり

平成30（2018）年、新百合ヶ丘地区の魅力を高め、地域の活性化を目指すことを目的として、企業体である「新百合ヶ丘エリアマネジメントコンソーシアム」が設立された。「しんゆりフェスティバル・マルシェ」の開催や季刊誌の発行など、新百合ヶ丘のブランド力アップを図っている。こうした取り組みも、発展の大きな一助となっている。

て、市が策定した「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」に基づき、市民と協働で令和6年度のソーシャルデザインセンター開設を目指し、持続可能な暮らしやすい地域づくりに取り組んでいく。

また、来年に控えている市制100周年・緑化フェアに向けて、麻生区の特徴の一つである豊かな環境を活かした事業展開をするなど、麻生区が掲げている「豊かな自然と芸術・文化が溶け合う活力あるまちづくり」をさらに推進していく。



しんゆりを明るく照らすイルミネーション

## 3 これから

地下鉄3号線の延伸が決定し、ますますの発展が楽しみなまちであるが、少子高齢化が進む中、多様化するニーズや課題に対応しつつ、区の魅力を向上させていく必要がある。その取り組みの一つとし



## コラム あなたは答えられる？



# 区名の選定理由を一挙紹介！

7区の区名は答えられても、それぞれの名称がなぜ選ばれたのかは意外と知らないもの。各区の名称は区の誕生に合わせて一般公募され、区名選定委員会で決定されました。ここでは、当時の市政だよりから、区名選定委員会で示された選定理由を紹介します。

### 川崎区

応募多数である中央区は、選定の基準（方位）で難点があり、その他の区名については、新区域を包括するものがなく、かつ川崎区という名称は中央区的な中枢的機能を持つ地区としてふさわしい名称であるので選んだ。

### 幸区

応募多数の日幸区は選定基準からはずれ、御幸区では包括的でないので、新区域全体にふさわしい名称として幸区を選んだ。

### 中原区

歴史的かつ包括的な名称として応募多数の中原区を選んだ。

### 高津区

応募多数である橘区も歴史的かつ包括的ではあるが、将来分増区の名称によりふさわしいという意見もあり、歴史的に地域発展の拠点であり、かつ現実に区域を包括している高津を区名に選んだ。



### 宮前区

橘あるいは橘樹（たちばな）の名は古く、市民の間には捨てがたい愛着がある。しかし、橘樹神社の存在や高津区橘出張所所管区域のかかわりなども考慮した結果、新区域を包括するによりふさわしい名称として応募数多数を占めていた宮前区を選んだ。

### 多摩区

稲田という名称は歴史上比較的新しく、この区域についてはさらに歴史的で、かつ多摩川と多摩丘陵の景観にふさわしい名称として応募多数の多摩を区名に選んだ。

### 麻生区

応募された中では柿生が多数を占めていたが、鎌倉時代の末期から「麻生郷」の記録があり、上麻生が明治22年に形成された柿生村の中心として発展の拠点となってきたことから、新区域を包括するによりふさわしい名称として麻生区を選んだ。